

現代のことは



こはら 小原 かつひろ 克博

普段当たり前のように過ごしている環境の中では、その環境そのものを自覚することはない。たとえば、空気無しで人間は生きることができないが、空気は存在をありがたく意識して生活することはない。同様に、民主主義は現代社会の当然の基盤であり、空気のように、人類にとつて普遍的に必要なものとして理解されるのが一般的だろう。

こうしたことを考え直すきっかけとなった出来事があった。昨年、京都で開催された国際会議の参加者の

中に、米国のフランシス・フクヤマ氏とイランのアフマド・ヴァエズィー氏がいた。両者とも一流の政治思想家である。ところが、その二人の民主主義に対する理解は、重なり合うどころか、互いにかなり違った方向を向いていることがわかった。簡単に言えば、フクヤマ氏はアメリカに代表されるリベラル・デモクラシー（自由民主主義）を理想とし、ヴァエズィー氏はイスラミック・デモクラシー（イスラーム民主主義）を理想としていた。

民主主義は人々を幸せにするのか？

ヴァエズィー氏に限らず、イスラーム圏では、西洋的民主主義を人間中心主義として批判する人が少なくない。民主主義とは何かという根本理解をめぐって、両者が真つ向から対立したのが私にとつては印象的であった。

そもそも、デモクラシーはギリシア語のデモス（人々）とクラティア（支配）に由来する。文字通り、人々による支配が古代ギリシア世界においても理想とされたことがわかる。ところが、当時「人々」の中には、奴隷や女性は含まれていなかった。現代、民主主義の守護者を自認するアメリカにおいてすら、黒人や女性に参政権が与えられたのは二十世紀になってからである。

「人々」による支配が、実際には、限られた人々による支配であったことは、こうしたことから明らかで

あるが、もう一つの問題は、多数者（通常は過半数）の意見が必ずしも「正しい」判断とは限らないという点である。イスラームの立場から、リベラル・デモクラシーを批判するのは、まさにこの点に関してである。大衆による支配は「神の法」や真理をないがしろにし、社会の道徳的腐敗を招きかねない、という危惧がそこにはある。

それに加え、「人々」の解放、中



三浦 景生

東の民主化を大義として行われたイラク戦争が泥沼化し、結果的に、アメリカ型民主主義の押しつけに対する強い反発が生じてきた。これほどの犠牲者が出るなら、サダム・フセインの独裁体制の方がましであったという声が出るほどに、問題は深刻である。そこから聞かなくてはならない、という叫びである。

フクヤマ氏が示唆するように、最終的にはリベラル・デモクラシーが他の種々のデモクラシーを吸収していくのである。あるいは、異なるデモクラシーのあり方が共存できるところで、世界の安全と平和が実現するのである。問いは尽きない。しかし、民主主義とは何かを批判的に問い直すために、この種の難問は大いに役立つであろう。

（同志社大教授・キリスト教思想）